

## ～読書の扉 パート1～ 弁護士 田中 勇輝

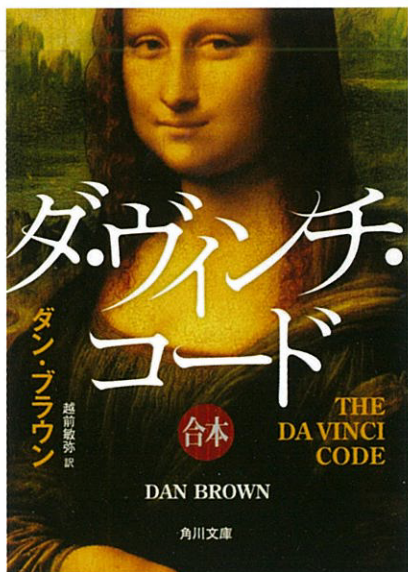
私の数少ない趣味の一つとして、いつも書いている旅行の他に小説があります。お恥ずかしながら、読む小説のほとんどは、古典文学ではなくいわゆるエンタメ系の小説ですが、せっかく読んでいるので、これまでの読書経験をお話してみたいと思います。

その前に、読書についてですが、私は子どもの頃も学生の頃もあまり読書をするタイプではありませんでした。司法試験合格後に時間ができ、少しずつ小説を読むようになりましたが、それでもちびちびという程度でした。

それが、4,5年ほど前にKindleという電子書籍リーダーを購入し、そこから爆発的に読書量が増えました。電子書籍リーダーは文庫本ほどの大きさをもち運びができますし、さらに、そんな物がなくても、今やスマホのKindle等のアプリでスマホでも読めるようになりましたので、今は、通勤時間、果てはトイレの中まで常に小説を読んでいるようになりました。

その頃からまず手始めに読んだのは、トム・ハンクス主演で

ハリウッドで映画化された話題となった、ダン・ブラウン著『ダ・ヴィンチ・コード』です。その圧倒的な面白さに惹かれ、そこから『ダ・ヴィンチ・コード』の主人公であるラングドンのシリーズである『天使と悪魔』等も読みました。私はそれ以前に二作とも映画を観てから読んだのですが、映画を観た時は面白く感じて、小説は話の概要は同じでも世界観は数倍以上でした。それまでは、小説を読むなら映画でも同じじゃないかなどと思っていたのですが、この二作を読んで、二時間という時間では描き切れるものはごくわずかで、小説はその数倍の面白さがあることに気付かされました。



ご存じのとおり、『ダ・ヴィンチ・コード』は、ルーヴル美術館の館長の死体が発見され、そこに残されていた暗号の秘密をハーバードの教授であるラングドンが追っていくという展開で、モナリザや最後の晩餐といった世界的名画に現れた秘密を明らかにしていくというものです。映画ではどうしてもアクションや映像でお客を呼ばないとならないため、さらにエンタメが強調されてしまいますが、宗教界のタブーに鋭く迫るスリリング感は映画とは全く別物のレベルでした。

これらを読んでからは、映画やドラマより小説は、自分で想像もでき、登場人物の微細な心情の動きまで味わうことができるのだなど、小説の面白さに目覚めた次第です。もちろん映画やドラマには別の楽しみがあり、どちらも好きなのですが、

と、ここまで書いてきて、ご紹介したい小説がありすぎて、今

回で終わるのは勿体ないと感じ、題名にもパート1と付し、まずは、私がよく読む小説家のご紹介をしてみたいと思います。

実話をモデルとした社会派小説の山崎豊子さんや相場英雄さん。社会派小説をよりエンタメ化した池井戸潤さん。NHKでドラマ化されたハゲタカの著者真山仁さん。これをいわゆる純文学

というのでしょうか、平野啓一郎さん、中村文則さん。ホラーも有名ですが、スリリングなサスペンスもよく書いておられる貴志裕介さん。サスペンス小説の薬丸岳さん。人間の闇の部分に光を当てた小説の多い新堂冬樹さん。ツイッター等のSNSやアイドルなどの現代的テーマから現代の若者の心を描く朝井リョウさん。紹介の必要すらない村上春樹さん。

まだまだいますが、ざっとメジャーな小説家の方々だけ挙げてみるとこんな感じです。どんな小説を書かれているかは、今回だけで終わらせるのは勿体ないので、次回以降にしたいと思います。私が主に好きなのは、実話を元にするなど実際の社会で起こった事件をテーマにして、そこから社会的な問題点をあぶり出そうとする小説です。山崎豊子さんなどはその典型で、東京裁判をテーマにした『二つの祖国』などで、東京裁判についても深く知る機会となりました。

ここで最後に『ダ・ヴィンチ・コード』の話に戻ると、同小説は、フィクションとは書かれていますが、冒頭に実在の組織名を挙げ、「この小説における芸術作品、建築物、文書、秘密儀式に関する記述は、すべて事実に基づいている」と述べられており、それ故に同小説が刊行された後、カトリック教会から反論がなされるなどの大きな反響を生みました。

こういう小説から、未知の世界を教えてもらい、そこから世の中の様々な事象に興味を持ち調べていくという過程が好きなのです。

ニュースに書くには丁度良い、いや、どうしても書きたいテーマを見つけたことができたので、今後また何度かに分けて上記の小説家の方達の小説の魅力をお届けして参りたいと思います。是非皆様からもお薦めの小説、小説家をお教え頂ければ是非とも参考にさせて頂きたいと思います。

